

「岩石の標本に学ぶ(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

このように、岩石の標本を直接コピー機の本稿台に置くのは、この標本の片面が、きれいに研磨されているからだ。表側は本来の岩石が持っている「質感」や「粒状性」がよくわかる。一方研磨面は、含まれている鉱物の結晶の大きさや色、形状などをくわしく観察できる。この岩石標本は12種類入りで4万円近くもする。しかし、産地のはっきりしている地層の露頭から採取された標本であること、手間のかかる研磨作業を経ていることなどを考えれば、むしろ安いぐらいに思える。(2ページ目に拡大画像)



子どもたちは、一つひとつの岩石を観察し、名称・産地・分類・特徴などを記録していた。たかが「石」なのだが、子ども(というより人類)というのは元来「石が好き」という遺伝子を持っていて、実に楽しそうに観察をしていた。

岩石の観察はむずかしい。特徴をことばで表現するのもむずかしいが、スケッチはもっとむずかしい。そこで、標本をすべてコピーの原稿台にのせて、カラーコピーしたものを配布することにした。標本には番号ラベルが貼ってあり、ラベルと対比しているので、種類を間違えることは決してない



子どもたちが特に興味を持ったことは「岩石は鉱物の集まりである」という点だ。特に花崗岩や閃緑岩の中には、肉眼でも見える鉱物の結晶が何種類も含まれている。その名称を聞きに来る子どもが多かった。その一粒一粒が鉱物であり、名称がついていることに、多くの子どもは興味を持ってくれたようだ。





